

## <エッセイ>医学史研究の高峰

著者	梁 ？
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	174-175
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006715">http://doi.org/10.15055/00006715</a>

## 医学史研究の高峰

梁 嵘

日文研が設立された当初、山田慶児教授の指揮下で、科学技術史の研究が展開され、医学史が特に重要視された。当時の日文研は、日本全国だけではなく、アジア地域の優秀な医学史研究者をも惹きつけていた。研究班と読書会を通して、研究上の新発見について意見を交換し、重要な問題について議論を交わした。山田先生は中国の医学の起源、中国医学の基盤を築いた『黄帝内経』の思想的構造、中国医学の核心的概念「気」、それを運ぶ媒介物の「運氣」などを深く研究され、独自の見解をもち、中国医学史の研究と発展に深遠な影響を与えている。特に「気」に関するご研究は、今日においてもなお学術的先見性をもちつづけている。

山田先生が退官されてから、栗山茂久先生が日文研において医学史研究のリーダーとなり、文化史の角度から、医学史研究の新しい領域を拓いた。先生は世界各地の研究者を日文研に招き、学術交流を行い、アジア医学史学会 (the Asian Society for the History of Medicine, ASHM) を成立させて、アジア地域の歴史学研究者に生命科学史、医学文化史の研究課題を与えた。中国の医学史研究の人材を育てるために、北京大学、復旦大学(上海)、南開大学(天津)を頻繁に訪れて、若手の医学史研究を指導してきた。中国の中堅研究者によって極めて高く評価されている。

現在、日文研の医学史研究を牽引しているのはフレデリック・クレインス先生で、西洋の医

学が日本の医学及び医学の概念に与えた影響という角度から、ヨーロッパから日本へ輸入された重要な医学書について深く探求されている。先生の研究はまだ中国語に翻訳されていないため、中国国内の研究者に与えた影響は限られてはいるが、日文研で先生と交流を行ってきた中国人研究者は、先生の慎重な態度と厳密な方法に大きな感銘を受け、多くのものを学んでいる。

日文研は医学史研究の最高峰だったことがあり、医学史研究者たちの心の聖地でもある。研究者たちの長年収蔵した医学の書物もそれぞれの収蔵者の研究を物語っているようである。宗田文庫の書籍は、宗田一先生の体温を帯びているようで、読む者の心を打つ。

日文研は成立してから瞬く間に三〇周年となった。日文研の輝かしい道程を振り返る時、これからも医学史研究を俯瞰する最高峰でありつづけるように祈念している。

（北京中医药大学教授）

原文…中国語

翻訳…郭南燕（国際日本文化研究センター准教授）